

活動名	団体名	学生ボランティア団体 OPERATION つながり
	地域	広島県東広島市
	代表者	代表 高橋 大海
	支援金額	50 万円
活動概要		
<p>活動目的・内容</p> <p>当活動は「震災復興支援」と「次世代人材育成」を特徴とし、以下3つの目標のもとで活動を展開した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.震災復興ボランティアの企画・運営・参加を通じて、学生に気付きと学びをもたらすこと 2.被災地域の住民の間に交流を生み出し、包括的な地域活性を目指すこと(地域連帯) 3.東北被災地域と広島が、学生を通してつながり、対象地域に継続的な生きがいの創造をもたらすこと <p>広島大学学生が、被災地の住民の生きがい創造のために、精神的健康を維持することを目的としたボランティアを組織し、全ての企画、運営、報告活動等を行った。被災地の学生、住民、自治体と協力し、現地主導の復興活動が継続的に行われるよう当初の計画も柔軟に変更を加えながら試行錯誤を繰り返し、活動を進めていった。</p> <p>活動内容</p> <p>広島大学大学生によって東北への派遣部隊「つながり隊」を結成し、各派遣において以下のような活動を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つながり隊5次派遣先遣隊 被災地域のニーズ調査 ・つながり隊5次派遣 <ol style="list-style-type: none"> ①宮城県石巻市の現状視察、②子ども支援、③東北の学生とのワークショップ「つなトーク」、④仮設住宅にて交流会 ⑤仮設住宅の世帯訪問、⑥いちご農園手伝い、⑦畑の掘り起し作業(ボランティアセンターを通して活動) ・つながり隊6次派遣先遣隊 被災地のニーズ調査 ・つながり隊6次派遣 <ol style="list-style-type: none"> ①宮城県石巻市の現状視察、②山元町の現状視察、③仮設住宅にて交流会、④仮設住宅の世帯訪問 ⑤A 石巻市スタディーツアー参加(小グループに分かれて活動)、⑤B 自宅避難されている方への支援(小グループに分かれて活動) ⑤C ワークショップ実施(小グループに分かれて活動)、⑤D ボランティアセンターの活動へ参加(小グループに分かれて活動) ⑥高校生対象のワークショップ実施 <p>また、各派遣終了後には報告書を作成し、報告会、展示会を開催し、出前講座を通して被災地の様子を伝える活動を行ってきた。</p> <p>◆実施時期</p> <p>期間 2012年4月1日から2013年3月31日、場所 宮城県石巻市、仙台市若林区、岩沼市、亘理郡亘理町、山元町</p> <p>つながり隊5次派遣先遣隊 2012年7月13日～17日、つながり隊5次派遣 2012年8月20日～31日</p> <p>つながり隊6次派遣先遣隊 2013年1月17日～21日、つながり隊6次派遣 2013年3月3日～14日</p> <p>◆参加人数</p> <p>広島大学学生 延べ53名、被災地域の学生 延べ18名、被災地域の高校生 延べ40名、仮設住宅住民 延べ100名</p> <p>参加総人員:延べ211名</p>		



つなトーク
現地学生と東北の未来について熱い議論を交わしました



交流会
仮設住宅で手芸を通じてたくさんお話をしました



高校生ワークショップ
亘理町の高校生と震災復興について話し合いました



農地復旧
津波で被害を受けた農地で瓦礫を取り除いています

◆実施に伴う効果

今回の震災復興活動では、被災地の大学生・高校生と共に活動を行った。そこで、彼らと農園の方々がつながり、高校生は活動後も自主的に農園のボランティアに訪れるようになった。また活動後、大学生を中心に現地で震災支援活動を行う団体を立ち上げたいという声があがった。これについて、現在、運営や連携方法等を議論している。本活動の働きかけにより、被災地に暮らす学生の間で、それぞれが持っていた復興を目指したいという共通の思いを結びつけることができ、また被災地の人々の自立を促進することができた。

また、当団体はこれまで被災地の大学生・高校生が主体的に支援活動を行うための動機づけやきっかけづくりとして、仮設住宅での交流会や世帯訪問を被災地に暮らす大学生・高校生と共にやってきた。つながり隊第6次派遣では、そのような実質的な活動に加えて、現地の高校生を対象としたワークショップを開催し、亘理町についての想いやボランティア活動への想い、またこれからの活動についての考えを高校生と共有し議論することができた。このワークショップに関して、参加した高校生にアンケートを行ったところ、「今後も継続して大学生(当団体メンバー)と交流・活動を行っていききたい」「ボランティアから支援を受けて受け身になるだけでなく、一緒に活動することで被災者も自立につながるのではないかと気づいた」といった声が出た。

最後に、第6次派遣において、今まで6度にわたり継続して派遣してきたからこそその成果が見られた。当派遣で活動した仮設住宅の多くは、過去の派遣においても活動を行ってきており、交流会に参加したある住民の方が、「OPERATION つながりが来るって聞いたから、来たよ」と仰っていた。これは、私たちが仮設住宅の住民の方々となつなかりを築き、それを育ててきたからこそその結果であり、私たちの存在が僅かなりにも被災地の人々の心に明るい光をもたらしていたら、それは何よりのことである。

◆苦勞した点

限られた活動期間中にメンバーひとりひとりがしっかりと計画してきたものを実施できるように、メンバーの健康状態を良好に維持することが非常に苦勞した。特に第5次派遣においては、夏の猛暑とタイトなスケジュールの中で、数人のメンバーが体調を崩した。この対処として、日々のミーティングの終了時間を早めることや休養時間を増やすなど対策を講じ、最も神経を使った。今後の派遣では、メンバーが万全な状態でボランティア活動に専念できるような環境を確保することへ計画段階から注意を向ける必要がある。

次に苦勞した点は、メンバー間の意識の差である。本派遣メンバーの多くが、初めて被災地に行きボランティアをするという人たちであった。活動準備段階において、一度被災地に訪れたメンバーは以前出会った人々との思い出が企画準備段階のモチベーションとなっていた。しかし、初めて被災地に訪れるメンバーは、そのようなことがないため、時にモチベーションを持続することが困難であった。企画準備段階では、企画を成功させるための準備に頭が向いてしまい、しばしば被災地のことが頭から離れがちになる。こういった意識の差を解消するために、今後の派遣準備段階では、被災地のことを考えるワークショップを行うなど、様々な工夫を取り入れていきたい。

◆今後の課題・発展の方向性

以下、これからの活動の方向性を主に3つ挙げる。

1. 1つの地域に集中的かつ継続的な支援をしていく

今回の派遣において、被災地の状況が大きく変化してきていることに気付いた。震災から1年半以上が経過し、仮設住宅に暮らしていた人たちに新たな動きが生じていた。新しく家を建て、そこへ移り住む人や、自治体が建てた公営住宅に移り住む人が出てきた。一方で、未だに仮設住宅にとどまっている人もいる。このように、仮設住宅において様々な立場の人が出てきている。このことにより、仮設住宅で積み上げられてきたコミュニティが衰退し、人々のさらなる心の健康悪化が懸念される。したがって、現地の人々の心に寄り添う活動の必要性が再び高まっている。これを受けて、当団体は一つの地域に集中して、継続的に現地の人々の心に寄り添う活動を行っていききたいと考えている。

2. 高校生との関係作りを段階的にやっていく

今回の派遣では、現地高校生との関係作りを重要な目的のひとつとして掲げていた。これは、現地高校生から私たちと一緒に震災支援をしたいという声寄せられたこと、そういった意欲を持った高校生が主体的に震災支援に取り組むための機会をづくりたいという、2つの理由から始まった。しかし、実際に関係作りを試みたところ、いくつか反省点があがった。例えば、高校生を対象としたワークショップを行う上で、事前に情報共有をあまりしていなかったため、参加したつながりメンバーと、高校生の意識に大きなギャップが生じたことや、高校生からの自発的な意見が少なかったことが挙げられる。その一方で、ワークショップではなく、仮設住宅での交流会で一緒に活動した高校生からは、「また活動したい」「楽しかった」などという肯定的な感想が多くあった。このことから、まずは一緒に活動をして、その後ワークショップなどの話し合いの場を設けるといった風に、段階を踏みながら高校生との関係作りを行う必要がある。

3. 次の地震災害にそなえる

今回の派遣の主要な目的のひとつは、防災について被災地の教訓から学ぶというものであった。防災レクチャーをしてくださった現地の方々には、「この震災の教訓を次に生かしてほしい」と言っていた。当団体は、こういった現地の人々から得た教訓を次の災害に生かすということ、また南海トラフ巨大地震の発生が懸念されていることの二点から、自分たちが住んでいる地域の災害や、他の地域で地震災害が起こった時に、率先して行動できる団体作りと、地域の人々への次の災害準備のための啓発活動を行っていききたい。

以上の活動の方向性を軸に、今後も学生を主体とした震災復興支援を展開していく。

◆活動を終えての感想・意見等

1年に渡る手厚いご支援、誠に感謝致します。おかげさまで、震災発生以来、継続的に被災地に向き合った活動を行うことができました。1年間の活動において被災地のどこにニーズがあるのか、またどこが問題なのかといった問題発見に始まり、どのような手法、活動を行うかという活動企画、そして活動に協力してくれた方々や、他の広島の人々に対する活動報告といった一連のプロセスを完結しました。その中で、問題発見力、企画力、表現力など社会で必要とされる力を養ったメンバーが多く見られました。また、メンバーが東北の人々と触れ合う中で、人とのつながりを大切にしたいという精神が育まれました。これからも当団体は学生を主体とした社会貢献活動を積極的に行っていきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。